説教 『　そして夜、幻がパウロに現れた　』

（交換講壇　説教　茅ヶ崎教会主日礼拝）

小河信一 牧師

使徒言行録 １６章６節～１０節

6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ
地方を通って行った。7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの
霊がそれを許さなかった。8 それで、ミシア地方を通ってトロアスに下った。9 その夜、パウロ
は幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたち
を助けてください」と言ってパウロに願った。10 パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐ
にマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわ
たしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。

本日は、茅ヶ崎教会の皆様と共に、信仰の先達たちが、香川へ、そして南湖へと、幾多の荒波やさざ波を越えて開拓伝道に乗り出してゆかれた教会の歴史を、使徒言行録16:6-10を通じて思い起こしたいと願います。

本日の礼拝の新約聖書について対応する個所として、旧約・ダニエル書10:10－11:1を取り上げました。

多彩に響き合っているダニエル書と使徒言行録を通じ、ダニエルとパウロ、両者の様子を捉えることにしましょう。その際に、私たちが掲げるべき大切な問いは、ダニエルとパウロはどのように難関を乗り越えていったのか、ということです。

一方、ダニエルは「チグリスという大河の岸」（ダニエル書10:4）に、他方、パウロは地中海沿いの港町トロアスにいました。ダニエル書と使徒言行録の文書成立の年代はおよそ260年かけ離れていますが、汀（みぎわ）に招かれたダニエルとパウロに、神の霊の力が現されました。力の尽き果てそうになっている者が「憩（いこ）いの水のほとり」（詩編23:2）で主なる神によって回復させられるというのは、天地創造以来の神の御心でした。

創世記1:2――

地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。

「動いていた」というのは、「羽ばたいていた」という意味で、神の霊が天使のように水辺を

舞っていたということでしょう。天使の羽が水に触れるとき、確かに水が動き、波立ちます（参照：ヨハネ福音書5:3-4）。それは、神の愛の力が、地の人と世界に触れている、つまり、御力が働いていることを証ししています。

自分がおごり、力（りき）んでいるときにはかえって、時代を貫いて多様であり豊かな神の霊の動きを、私たちは見逃していることが多いのではないでしょうか。ところが、私たちが挫折したり弱っているとき、意外にも、その霊の動きに気づかされることがあります。

どうしてダニエルは、そしてパウロは、気力も言葉も失うような窮地から立ち上がることができたのか、また、どうしてパウロは伝道の下り坂の渦中に、海を渡り越えるような大飛躍ができたのか、見てみましょう。

ダニエル書10:7-8――

7 この幻を見たのはわたしダニエルひとりであって、共にいた人々は何も見なかったのだが、強い恐怖に襲われて逃げ出し、隠れてしまった。8 わたしはひとり残ってその壮大な幻を眺めていたが、力が抜けていき、姿は変わり果てて打ちのめされ、気力を失ってしまった。

この場面は、ダニエルが「幻を見た」という出来事の前半部に当たります。三週間、嘆き祈り、美食を断っていたダニエルがいかに弱っていたかは、「逃げ出し、隠れてしまった」との一句に象徴されています。そのダニエルのどん底において、幻が現れると同時に、（ガブリエル〔ダニエル書8:16、9:21〕という名と思われる）天使長がダニエルに神の言葉を取り次ぎます。

一挙にではなく、徐々にダニエルを回復させようとする慎重な天使長の言葉遣いですが、次の言葉に注目しましょう。

ダニエル書 10:19――

彼（天使長ガブリエル）は言った。「恐れることはない。愛されている者よ。平和を取り戻し、しっかりしなさい。」

字義通りに、ダニエルは神によって「愛されて」います。そして、神は彼が「平和を取り戻」せるように介入されました。ダニエルが今「しっかり」すべきことは、この神の愛を受け止め、そして神の平和に生きることです。

ダニエルはまだ明確に知りませんが、すべての人間に「愛」と「平和」をもたらす決定的な介入は、主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって成し遂げられました。ダニエルに対する主なる神の御力による回復は、まさしく主イエス・キリストの救いを指し示しています。

天使長ガブリエルは、「お前たちの天使長ミカエル」と共に、ペルシアやギリシアの天使長（＝

各民族の守護天使たち）の妨害をかいくぐって、死んだような状態にあったダニエルを助け起こしました。このように主の使いに囲まれて（詩編34:8）、ダニエルは決して「ひとり」ではありませんでした。ダニエルは主にあって強められ、主にあって奮い立たされました（10:18-19には「強くする」という同一の動詞が５回出ています）。

ダニエル書10:1――

ベルテシャツァルと呼ばれるダニエルに一つの言葉が啓示された。この言葉は真実であり、理解するのは非常に困難であったが、幻のうちに、ダニエルに説明が与えられた。

「幻を見た」出来事の半（なか）ばまでは、気力の衰えに打ち勝てずに尻込みし、神の御心を悟り得なかったダニエルでしたが、天使長の忍耐強い励ましによって、ダニエルは神の真実な言葉を受け入れることができました。

それでは、パウロの「幻を見た」出来事に目を移しましょう。

使徒言行録16:8――

それで、（彼ら〔パウロ、シラス、テモテ〕は）ミシア地方を通ってトロアスに下った。

パウロたち一行は、小アジア（トルコ半島）の内陸部を抜けて、地中海に臨む港町トロアスに出ました。本来「下って行った」というのは地理的な意味でしょうが、それはあたかもパウロの第２回伝道旅行の「下り坂」、すなわち、挫折を暗示しているかのようです。

というのも、「下り坂」に至った経過として、二度、神の霊により「否（いな）／No」に出合ったと記されているからです。

使徒言行録16:6-7――

6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。

二度、しかも「聖霊」から「イエスの霊」へと、神の御告げはより強調されていますから、パウロたち一行の進路変更は、待った無しです。即、それに従わざるを得ません。

天使長に出会ったダニエルの出来事を想起すれば分かることですが、気力が衰え果てているとき、それ故にかえって、内向きにかたくなになり、自分が前面に出過ぎている（参照：ダニエル

書10:16-17の原文には「私」が頻出しています）とき、私たちは冷静に神の霊の働きを受け入れることができません。

もし伝道旅行全体が聖霊の導きのもとにあるとすれば、聖霊なる神が、パウロたち一行に、時に‘Yes’あるいは‘Go！’を告げられ、また時に‘No’と言われるのは当然ではないでしょうか（参照：Ⅰテサロニケ2:18、ローマ1:13）。それこそ、そこに自由闊達（かったつ）な神の霊が人に降っている証拠ではないでしょうか。

私たちが聖霊によって何事かを妨げられて、ひどく落ち込むのは、人への体裁のためか、あるいは、自分の意地のためでしょうか。忍耐をもって‘No’と言われる聖霊に身をゆだねきることが、いずれにせよ、私たちにとって最善の道です。

夕方の「エマオ途上の物語」（ルカ福音書24:13-35）を思い起こしながら、少し詩的に語るならば――

人の目には、夕陽が海に沈んでいくように、陸上の道が海中に没しそうに見えます。伝道の旅が消えそうに思われます。

そこでまさに奇跡的に、つまり、ただひたすら神の御力によって、海上の道が切り開かれるのです。「イエスの霊」の働きがあるかぎり、パウロたちは海を渡り越えて、新しい陸地で福音宣教の道を歩み続けます。

使徒言行録16:9――

その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人（男性 / 単数形）が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。

「その夜、パウロは幻を見た」の個所の直訳は、「そして夜、幻がパウロに現れた」です。大海という障壁にぶつかってしまったとパウロたちが感じるような瀬戸際で、「そして」、つまり、次への展開がありました。この「そして」は、新たな計画の遂行に向かって、神の時が流れ始めたことを表しています。伝道がさえぎられたかに見えたのは、一時のことで、新しいうねりが出て来ました。突如、逆風から順風へと風向きが変わったのです。

使徒言行録16:10――

パウロがこの幻を見たとき、<u>わたしたち</u>はすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。

伝道旅行の分水嶺を成す「そして」から、「すぐに」（出発する）へと連係していきました。

「（私たちは）確信するに至ったからである」の原意は、「共に結び合った」です。すなわち、神の召しという先行する神の愛と義によって、主なる神と使徒パウロの心が結び合わされたことを意味しています。そして、神と人との霊的な結束は、自ずから「私たち」人間同士の交わりを強めました。

主なる神は、いきなりパウロを地中海に放り込んだわけではありません。それ以前から、神はパウロに対し、「私たち」信仰者の交わりという支えを準備しておられました。主の使いがダニエルを取り囲んでいたように、伝道旅行出発に際しては、シラスを、そしてその途上では、テモテを加えながら、船出までには、「私たち」（ルカが加わった？）という一行が整えられました。それは、小さいながらも教会という船だったのではないでしょうか。

パウロはこのようにして、立ちはだかる難関を乗り越えて、新しい伝道の開拓地へ進んで行きました。私たちはその背後に、パウロたちを送り出した教会の祈り（参照：使徒13:3）と支援があったことを忘れてはなりません。異邦人伝道の拠点、アンティオキア教会は、パウロのグループの他、バルナバとマルコを地中海伝道に派遣しました

使徒言行録15:40――

一方、パウロはシラスを選び、（シリアのアンティオキア教会の）兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した（他に使徒14:26-27、15:33,35参照）。

兄弟たち（の信仰）にあって、主の恵みに（パウロは）捕らえられて――と明記されています。「主の恵み」というのは、主イエス・キリストの十字架と復活によって成し遂げられたこと、すなわち、私たちの罪と死からの解放を指し示しています。初代教会の信徒たちは、教会の〈内〉にあっても、また新たな伝道の際に〈外〉にあっても、「主の恵み」にあずかり続けました。彼らは、正しい信仰を保つのは、自分たちの努力ではなく、礼拝と日々の祈り（誰かに祈られていることも含めて）であると知っていたのです。私たちが礼拝と祈りとを基とするとき、聖霊が自由闊達に働きます。そうして、パウロたち一行のように「私たち」も、主の乗り越えさせてくださる御力にあずかり、最も大いなる幻、天の国を望み見ることができるのではないでしょうか。